

# 東日本大震災とメディア報道

## 受け手市民の“成長”に応えよ

### 進む伝統媒体と新媒体の連携

東日本大震災は、ジャーナリズムのありようにも大きな課題を与えた。メディアを取り巻く法制度や倫理を専門とする山田健太准教授に寄稿していただいた。



山田 健太  
文学部  
人文・ジャーナリズム学科  
准教授

ジャーナリズムの問題は、①初期段階における伝統メディアの「瞬発力」の発揮、②その後の伝統メディアの検証力・批判力の不足、③その過程で見えてきた「原子力ムラ」力学におけるメディアの限界、④放射能汚染地域における取材・報道空白、⑤とりわけテレビの安心

さらにはこれらを通じた、④メディアの役割分担の明確化と特性の顕在化、⑤受け手に生まれたクロスメディア接触の実態、が明らかになったと考える。

（やまだ・けんた）とメディア」として論稿をまとめている。まは、いち早く日本記者クラブで各紙面の検証結果を発表するほか（模様は日本記者クラブHP 4月28日会見分）で配信中、琉球新報や毎日新聞の連載コラムで各メディアの報道や政府対応を分析、「エディターシップ」(日本編集者学会紀要)で「震災

ある。放射線量を基準にした取材規制ルールはJOCの東海村事故の際にできたものが大半だと思われるが、当時は単発事故を想定しており継続的な状況は考えていなかった。今回、それをそのまま適用するのは無理があったが、ほかに基準がないなかで当初の判断基準としては止むを得なかった面が強い。その後、運の工夫は見られるものの、中高年記者なら行ってよいというのでは基準というより一時しのぎに過ぎないのではないか。もちろん、リスクを負

### メディア特性が現れた報道

今回の「災害報道」の特徴は大きく、テレビやラジオ、新聞等の伝統メディアを中心とするジャーナリズムのありようの問題と、インターネット等

伝統的なメディアは発生の当初、行政を遙かに上回る量と質の速報で被害実態の共有化に貢献し、同時に一定の安心感の醸成、広く支援力の形成という点で大きな力を発揮した。それは、継続的安定的な取材網を有し、しかも鍛えられたプロフェッショナルな記者が精度の高い情報を現地発で発信し続けたことに裏打ちされている。

もちろん、そうした状況をきちんと理解し、対応をとらなくてはならないのはメディア側も同じだ。そのなかで伝統メディア、とりわけ新聞やテレビは「被災者に寄り添う報道」をコンセプトに番組・紙面作りを行って

要はないと思う。遺体映像がなくても今回は悲惨な状態についての情報の共有や共感できる絵作りができたと思うからだ。ただし報道機関は、被災地以外の一般市民に浸透

援に活躍したが、伝統メディアは圧倒的な速報性、情報の豊富さ、信頼性で、本来の力が社会に再び発揮されるべきだ。その力が著者の言う「言論公共空間」を作り、市民社会に多大な役割を果たしていることを分析する。

このうち、第1のジャーナリズムの問題とが

メディアは、自らの取材で得た確実な情報のみを流すことを旨としてきた。その関係で情報の信頼性が高いというところから政府発の情報を民間情報に比較してより上位に置く傾向にあった。これが「情報隠し」とみられることになったわけである。

もちろん、そうした状況をきちんと理解し、対応をとらなくてはならないのはメディア側も同じだ。そのなかで伝統メディア、とりわけ新聞やテレビは「被災者に寄り添う報道」をコンセプトに番組・紙面作りを行って

要はないと思う。遺体映像がなくても今回は悲惨な状態についての情報の共有や共感できる絵作りができたと思うからだ。ただし報道機関は、被災地以外の一般市民に浸透

援に活躍したが、伝統メディアは圧倒的な速報性、情報の豊富さ、信頼性で、本来の力が社会に再び発揮されるべきだ。その力が著者の言う「言論公共空間」を作り、市民社会に多大な役割を果たしていることを分析する。



▲ 福島市内・東電記者会見の様子  
＝5月3日、山田准教授撮影

「ただしその後は政府等の公的機関の情報に頼らざるを得ず、大本営発表」という批判を受けることになった。そこに従来型の取材報道体制への懐疑や批判が含まれていることが重要な。すなわちこれまで伝統メ

あるいはテレビの場合、刺激的な情報や凄惨な画像を流すと社会の混乱を引き起こすので放送

その関係で難しい問題が遺体写真・映像を典型例とした、凄惨な情報の報道自粛である。最初の3カ月から半年という範囲では遺体映像を出す必

現状を見つめ、業界が抱える問題、これからのジャーナリズムの行くべき方向を考え、提言している。(三省堂・本体価格2200円十税)

### 被災者に寄り添う報道の意味

### 伝統メディアへ提言

#### 『ジャーナリズムの行方』



寄稿の山田健太准教授「活字の衰退」などでマスメディア終えん論が言われる中、本書は本来のメディアの存在意義を問う本使命であるジャーナリズム性を自覚することで、展望が開けることを示唆している。